

は、あると答えた者（男性 31.6%、女性 28.9%）より SDS 得点が有意に高かった（男性： $p<0.05$ 、女性： $p<0.001$ ）。月収については、23.2%の男性が 10-20 万円と答え、10 万円未満（6.0%）、20 万円以上（70.9%）と答えた群よりも SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.01$ ）

ソーシャルネットワーク（表 2）：Y 市では、女性で、全ての項目において、SDS 得点と有意差が認められた。別居子との交流については、46.9%があまり会わないと回答し、月 1-2 度以上と回答した群（53.1%）に比べて SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.001$ ）。近隣とのつきあいでは、21.4%が疎遠と答え、親密と答えた群に比べて SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.05$ ）。親しい友人の有無についても、11.5%が親しい友人はいないと答え、いると答えた群（88.5%）より SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.01$ ）。親しい親戚の有無についても同様で、46.3%が親しい親戚はいないと答え、いると答えた群（53.7%）より SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.01$ ）。また、団体加入の有無については、22.9%が団体に加入しておらず、団体に加入している群より SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.05$ ）。男性において、全ての項目で有意差はみられなかった。S 市では、近隣とのつきあい、親しい親戚の有無に関する項目において、有意差が認められた。近隣とのつきあいでは、42.8%の女性が疎遠と答え、親密と答えた群（57.2%）に比べて SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.05$ ）。男性の 17.5%が親しい親戚はいないと答え、いると答えた群（82.5%）より SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.01$ ）。

ソーシャルサポート（表 3）：Y 市では、女性において、援助者の有無に関する項目で、SDS 得点と有意差が認められた。2.6%が相談者がいないと答え、相談者がいる群（97.4%）に比べて SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.001$ ）。男性において、全ての項目で有意な差はみられなかった。S 市では、サポート提供の有無に関する項目において、有意差がみられた。8.3%の女性がないと答え、あると答えた群（91.7%）に比べて SDS 得点が有意

に高かった（ $p<0.05$ ）。

身体的健康状態（表 4）：Y 市では、主観的健康状態について、男女どちらにおいても、SDS 得点に有意な差が認められた。男性の 19.0%、女性の 25.0%が主観的健康状態が不良と答え、良好と答えた群（男性 81.0%、女性 75.0%）に比べ SDS 得点が有意に高かった（男性： $p<0.01$ 、女性： $p<0.001$ ）。また、女性において、入院の有無、身体の痛みの有無、視力に関する項目で、有意な差がみられた。入院の有無については、18.8%が 1 年以内に入院経験があり、入院経験のない群（81.3%）よりも SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.05$ ）。身体の痛みについても、47.6%があると答え、ない群（52.4%）に比べて SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.01$ ）。また、視力との関連については、11.5%が不良と答え、良好と答えた群（88.5%）に比べ SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.01$ ）。S 市では、失禁を除く全ての項目において、男女ともに有意差が認められた。主観的健康状態について、男性の 20.9%、女性の 17.3%が主観的健康状態が不良と答え、良好と答えた群（男性 79.1%、女性 82.7%）に比べ SDS 得点が有意に高かった（男性： $p<0.001$ 、女性： $p<0.001$ ）。また、入院の有無については、男性の 24.5%、女性の 20.1%が 1 年以内に入院経験があり、入院経験のない群（男性 75.5%、女性 79.9%）よりも SDS 得点が有意に高かった（男性： $p<0.05$ 、女性： $p<0.001$ ）。身体の痛みについても、男性の 36.4%、女性の 48.5%があると答え、ない群（男性 63.6%、女性 51.5%）に比べて SDS 得点が有意に高かった（男性： $p<0.001$ 、女性： $p<0.001$ ）。聴力では、男性の 21.3%、女性の 13.7%が聴力が不良と答え、良好と答えた群（男性 78.7%、女性 86.3%）に比べ SDS 得点が有意に高かった（男性： $p<0.05$ 、女性： $p<0.05$ ）。また、視力との関連については、男性の 6.5%、女性の 4.4%が不良と答え、良好と答えた群（男性 93.5%、女性 95.6%）に比べ SDS 得点が有意に高かった（男性： $p<0.05$ 、女性： $p<0.05$ ）。痴呆の徴候については、男性の 8.4%、女性の 6.4%があると答え、

ないと答えた群（男性 91.6%、女性 93.6%）よりも SDS 得点が有意に高かった（男性： $p<0.01$ 、女性： $p<0.001$ ）。男性においてのみ、失禁に関する項目で、有意な差がみられた。11.2%があると答え、ない群（88.8%）に比べて SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.01$ ）。

社会活動性（表 5）：Y 市では、SDS 得点と有意差がみられたのは、趣味や生きがいの有無であった。男性では 11.6%、女性では 26.5%が趣味や生きがいを持っておらず、趣味や生きがいを持っている群（男性 87.1%、女性 70.4%）に比べて SDS 得点が有意に高かった（男性： $p<0.001$ 、女性： $p<0.001$ ）。S 市では、ADL、趣味や生きがいに関する項目で、有意な差がみられた。男性において、5.8%が ADL 不良と答え、良好と答えた群（94.2%）に比べて SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.001$ ）。また、男性の 13.6%、女性の 10.0%が趣味や生きがいを持っておらず、趣味や生きがいを持っている群（男性 83.1%、女性 88.6%）に比べて SDS 得点が有意に高かった（男性： $p<0.001$ 、女性： $p<0.01$ ）。

ストレスフル・ライフイベント（表 6）：Y 市では、本人の健康状態悪化に関する項目で、男女ともに有意差が認められた。男性の 14.3%、女性の 16.7%が健康状態が悪化したと答え、悪化してないと答えた群（男性 85.7%、女性 83.3%）に比べ SDS 得点が有意に高かった（男性： $p<0.01$ 、女性： $p<0.001$ ）。また、女性では、望まない住居の変化、配偶者・家族の病気、借金の増加において、有意な差がみられた。望まない住居の変化については、1.0%があると答え、ないと答えた群（99.0%）に比べ SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.05$ ）。配偶者・家族の病気についても、8.9%があると答え、ないと答えた群（91.1%）に比べ SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.01$ ）。また、借金の増加については、0.5%があると答え、ないと答えた群（95.5%）に比べ SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.05$ ）。女性において、過去 1 年以内に経験したライフイベントの数と SDS 得点は有意に関連していた（ $r=0.24$ 、 $p<0.01$ ）。S 市では、本

人の健康状態悪化、経済状態悪化に関する項目で、男女ともに有意差が認められた。男性の 18.7%、女性の 21.1%が健康状態が悪化したと答え、悪化してないと答えた群（男性 81.3%、女性 78.9%）に比べ SDS 得点が有意に高かった（男性： $p<0.001$ 、女性： $p<0.001$ ）。また、男性の 18.1%、女性の 18.1%が経済状態が悪化したと答え、悪化してないと答えた群（男性 81.9%、女性 81.9%）に比べ SDS 得点が有意に高かった（男性： $p<0.05$ 、女性： $p<0.05$ ）。さらに、男性では、社会的役割の喪失、家族とのトラブル増加において、有意な差がみられた。社会的役割の喪失については、1.9%があると答え、ないと答えた群（98.1%）に比べ SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.01$ ）。家族とのトラブル増加についても、1.9%があると答え、ないと答えた群（98.1%）に比べ SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.01$ ）。

## 2. ベースライン時の状況と 1995 年時の SDS 得点について（表 7-11）

基本属性（表 7）：Y 市では、有意差がみられたのは、仕事の有無、家族構成であった。男性の 8.3%が一人暮らしで、家族と同居している群（91.7%）に比べて SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.05$ ）。女性において、73.1%が仕事をしておらず、仕事をしている群（21.4%）に比べて SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.05$ ）。S 市では、収入に関する項目でのみ、有意差がみられた。4.6%が 10 万円未満で、20 万以上の群（72.5%）に比べて SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.05$ ）。

ソーシャルネットワーク（表 8）：Y 市では、団体への加入に関する項目で、有意差が認められた。団体に加入していない女性（42.7%）は、加入している女性（57.3%）に比べ、SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.05$ ）。一方、S 市では、全ての項目で、男女どちらにおいても、SDS 得点の差は認めなかった。

ソーシャルサポート（表 9）：Y 市では、全ての項目で、男女どちらにおいても、SDS 得点の差は認めなかった。これに対し、S 市では、援助者の

有無、相談者の有無で有意差がみられた。援助者のいない男性（3.2%）は、いる男性（96.8%）に比べ、SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.05$ ）。相談者のいない女性（4.9%）は、いる女性（95.1%）に比べ、SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.05$ ）。

身体的健康状態（表 10）：Y 市では、有意差がみられたのは、主観的健康状態、身体の痛み、痴呆の徴候であった。主観的健康状態については、男女に関わらず、健康状態が不良と答えた者（男性 18.8%、女性 24.3%）は、良好の者（男性 81.3%、女性 75.7%）より SDS 得点が有意に高かった（男性： $p<0.05$ 、女性： $p<0.01$ ）。身体の痛みについては、46.0%の女性があると答え、ない群（54.0%）に比べて SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.01$ ）。痴呆の徴候については、女性の 1.6%があると答え、ないと答えた群（98.4%）よりも SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.01$ ）。S 市では、有意差がみられたのは、主観的健康状態、身体の痛み、聴力、失禁であった。主観的健康状態については、男女に関わらず、健康状態が不良と答えた者（男性 15.5%、女性 19.2%）は、良好の者（男性 84.5%、女性 80.8%）より SDS 得点が有意に高かった（男性： $p<0.01$ 、女性： $p<0.001$ ）。また身体の痛みについても、男女ともに、痛みがあると答えた者（男性 35.8%、女性 46.3%）は、ない者（男性 64.2%、女性 53.7%）より SDS 得点が有意に高かった（男性： $p<0.01$ 、女性： $p<0.001$ ）。視力については、3.2%の男性が不良と答え、良好と答えた群（96.8%）に比べて SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.05$ ）。失禁については、男性の 9.0%があると答え、ない群（91.0%）よりも SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.01$ ）

社会活動性（表 11）：Y 市では、女性において、IADL の数と SDS 得点との間に有意な相関がみられた（ $r=0.16$ 、 $p<0.05$ ）。男性では、SDS 得点との間に有意な関連はみられなかった。S 市では、男性において、ADL と趣味や生きがいに関する項目で、有意差がみられた。ADL については、3.9%が不良と答え、良好の群（96.1%）に比べて SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.01$ ）。趣味や生

きがいについても、7.9%が持っていないと答え、持っていると答えた群に比べて SDS 得点が有意に高かった（ $p<0.05$ ）。

#### 4. 1995 年時の状況が 1995 年時の SDS 得点に及ぼす影響（重回帰分析:男性）

1995 年時の SDS 得点を目的変数、1 要因の分散分析で有意差が認められた変数を予測変数とした重回帰分析を行った。年齢・教育歴・ベースライン調査時の SDS 得点、慢性疾患数を調整した結果、Y 市では、1995 年時の SDS 得点とベースライン時の SDS 得点との間に有意な正の関連がみられ、主観的健康度との間に負の関連がみられた。このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=0.30$  であり、有意であった（ $p<0.001$ ）。S 市では、1995 年時の SDS 得点とベースライン時の SDS 得点、身体の痛みとの間に有意な正の関連がみられ、親しい親戚の有無、聴力との間に負の関連がみられた。このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=0.60$  であり、有意であった（ $p<0.001$ ）。表 12 に重回帰分析の結果を示した。

#### 5. 1995 年時の変数が 1995 年時の SDS 得点に及ぼす影響（重回帰分析:女性）

1995 年時の SDS 得点を目的変数、1 要因の分散分析で有意差が認められた変数を予測変数とした重回帰分析を行った。年齢・教育歴・ベースライン調査時の SDS 得点、慢性疾患数を調整した結果、Y 市では、1995 年時の SDS 得点とベースライン時の SDS 得点、ライフイベント数との間に有意な正の関連がみられ、別居子との交流、主観的健康状態との間に負の関連がみられた。このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=0.42$  であり、有意であった（ $p<0.001$ ）。S 市では、1995 年時の SDS 得点とベースライン時の SDS 得点、慢性疾患数との間に有意な正の関連がみられ、仕事、主観的健康状態との間に負の関連がみられた。このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=0.59$  であり、有意であった（ $p<0.001$ ）。表 12 に重回帰分析の結果を示した。

## 6. 1992年時の変数が1995年時のSDS得点に及ぼす影響（重回帰分析）

1995年時のSDS得点を目的変数、1要因の分散分析で有意差が認められた変数を予測変数とした重回帰分析を行った。年齢・教育歴・ベースライン調査時のSDS得点、慢性疾患数を調整した結果、両市において、有意な関連はみられなかった。

## D. 考 察

本研究は、2回の調査で、旧産炭過疎地および都市における高齢者の抑うつ状態に及ぼすサポートネットワークや、ライフイベントを含む諸要因の影響について、縦断的に検討した点で意義がある。

本結果から、高齢者の抑うつ状態は、3年前の状況よりも現時点の状況により強く影響を受けていることが示唆された。

女性においては、ライフイベントの経験数と抑うつ状態との関連は、多変量解析によって他の要因を調整した後も有意であった。調査以前に経験したライフイベントの数が多いほど、抑うつ得点が高まるという先行研究1)を支持していると考えられる。さらに、本結果から、過去1年間のライフイベントの経験数は高齢者の抑うつ状態に影響を与えるが、女性の方がその影響は強く、男女差が存在する可能性が示唆された。

横断研究の結果から、ネットワークの存在は、特に女性において有意に抑うつ傾向と関連していた。特に、別居子との交流頻度が多いほど、抑うつ得点が低くなることが示唆された。男性では、ネットワークやサポートの有無よりも、仕事や趣味・生きがいを持ち、身体的な健康状態が良好であることが、抑うつ得点を低めることが示唆された。Y市とS市では、ネットワークおよびサポートの抑うつへの役割が異なっていた。これは、サンプルサイズが小さく十分な検出力を持っていないことが原因と考えられるが、この両地域に在住する高齢者のネットワークやサポートの様相が異なることが指摘されており3)、本結果はその影響

を反映しているかもしれない。今後、農村に在住する高齢者を含めて、再度、調整と解析を行う必要がある。

## E. 結 論

高齢者の抑うつ状態の慢性化、うつ病発症を予防するため、本研究から示唆される対策として、ストレスフル・ライフイベント経験後の抑うつ状態の評価、高齢者への適切なソーシャルサポートネットワーク構築に関する地域ベースの取り組みや、高齢者の社会的参加の促進が挙げられる。今後、先行研究および本研究の調査から得られた知見をふまえ、高齢者における抑うつの予防やQOL向上の適切な対策を講じていくことが望まれる。

## 文 献

- 1) Glass, T. A., Kasl, S. V., & Berkman, L. F. 1997 Stressful life events and depressive symptoms among the elderly. *Journal of Aging Health*, 9, 70-89
- 2) Katz, S. 1983 Assessing self-maintenance: activities of daily living, mobility, and instrumental activities of daily living. *Journal of the American Geriatrics Society*, 31, 721-727
- 3) 岸玲子、江口照子、笹谷春美、矢口孝行 1994 高齢者のソーシャル・サポートおよびネットワークの現状と健康状態—旧産炭地・夕張と大都市・札幌の実態 日本公衆衛生雑誌、41、474-488
- 4) 古谷野亘、柴田博、中里克治、芳賀博、須山靖男 1987 地域老人における活動能力の測定—老研式活動能力指標の開発 日本公衆衛生雑誌、34、109-114
- 5) Oxman, T. E., Berkman, L. F., Kasl, S., Freeman, D. H. Jr., & Barrett, J. 1992 Social support and depressive symptoms in the elderly. *American*

- Journal of Epidemiology*, 135, 356-368
- 6) Prince, M., Harwood, R. H., Thomas, A.,  
A prospective population-based cohort  
study of the effects of disablement and  
social milieu on the onset and  
maintenance of late-life depression:  
The Gospel Oak Project VII .  
*Psychological Medicine*, 28, 337-350.
- 7) Turvey, C. L., Carney, C., Arndt, S.,  
Wallace, R. B., & Herzog, R. 1999  
Conjugal loss and syndromal  
depression in a sample of elders aged 70  
years and older. *American Journal of  
Psychiatry*, 156, 1596-1601
- 8) van Grootheest, D. S., Beekman, A. T.,  
Broese van Groenou, M. I., & Deeg, D. J.  
1999 Sex differences in depression  
after widowhood. Do men suffer more?  
*Social Psychiatry & Psychiatric  
Epidemiology*, 34, 391-398
- 9) Wallance, J., & O' hara, M. W. 1992  
Increases in depressive  
symptomatology in the rural elderly:  
results from a cross-sectional and  
longitudinal study. *Journal of  
Abnormal Psychology*, 101, 398-404
- 10) Zung, W. W. K., 1965 A self-rating  
depression scale. *Archives of general  
psychiatry*, 12, 63-70
- スフル・ライフイベントの影響とソーシャルサポ  
ートネットワークの役割—旧産炭過疎地における  
縦断研究」 第75回日本衛生学会総会。新潟  
(2005.3.27-30)

## F. 研究発表

### 1. 論文発表

岸玲子、浦田泰成、西條泰明、堀川尚子：「高齢者の抑うつに及ぼすストレスフルライフイベントと社会的サポートネットワークの役割—北海道における縦断研究」 精神神経学雑誌。投稿中

### 2. 学会発表

浦田泰成、吉岡英治、佐藤徹郎、堀川尚子、西條泰明、岸玲子：「高齢者の抑うつに及ぼすストレ

表 1 1995 年時の基本属性と 1995 年時の SDS 得点

	Y 市							
	男性 (n=147)				女性 (n=192)			
	n	%	SDS(SD)	F 値	n	%	SDS(SD)	F 値
配偶者								
1.あり	129	88.4	33.2(5.5)	n.s.	103	53.9	35.5(8.2)	n.s.
2.なし	17	11.6	33.6(8.1)		88	46.1	35.0(6.9)	
仕事								
1.あり	53	36.1	31.6(5.7)	6.7*	46	24.0	31.0(5.3)	20.8***
2.なし	94	63.9	34.1(5.7)		146	76.0	36.6(7.7)	
収入								
1.10 万円未満	14	9.9	32.9(6.2)	n.s.	61	32.6	36.0(8.6)	n.s.
2.10-20 万円	35	24.8	35.1(6.7)		82	43.9	35.0(7.0)	
3.20 万円以上	92	65.2	32.4(5.3)		44	23.5	35.1(7.6)	
家族構成								
1.一人暮らし	12	8.2	35.4(8.8)	n.s.	50	26.0	35.1(8.1)	n.s.
2.家族と同居	135	91.8	33.0(5.5)		142	74.0	35.3(7.4)	

\*  $p < 0.05$ , \*\*\*  $p < 0.001$

  

	S 市							
	男性 (n=155)				女性 (n=204)			
	n	%	SDS(SD)	F 値	n	%	SDS(SD)	F 値
配偶者								
1.あり	136	90.7	34.6(8.2)	n.s.	94	46.1	35.1(7.4)	n.s.
2.なし	14	9.3	34.2(8.0)		110	53.9	34.9(7.1)	
仕事								
1.あり	49	31.6	32.3(6.8)	5.7*	59	28.9	32.0(6.5)	15.2***
2.なし	106	68.4	35.6(8.6)		145	71.1	36.2(7.1)	
収入								
1.10 万円未満	9	6.0	31.0(4.4)	8.5***	44	22.6	35.6(8.7)	n.s.
2.10-20 万円	35	23.2	39.0(10.1)		72	36.9	35.8(8.0)	
3.20 万円以上	107	70.9	33.1(6.9)		79	40.5	34.1(5.6)	
家族構成								
1.一人暮らし	18	11.8	37.4(11.1)	n.s.	53	26.4	35.5(7.8)	n.s.
2.家族と同居	135	88.2	34.1(8.2)		148	73.6	34.8(7.0)	

\*  $p < 0.05$ , \*\*\*  $p < 0.001$

表2 1995年時のソーシャルネットワークと1995年時のSDS得点

	Y市							
	男性 (n=147)				女性 (n=192)			
	n	%	SDS(SD)	F値	n	%	SDS(SD)	F値
別居子との交流								
1.月1-2度以上	85	57.8	33.1(5.4)	n.s.	102	53.1	33.4(7.2)	13.4***
2.あまり会わない	62	42.2	33.3(6.4)		90	46.9	37.3(7.6)	
近隣とのつきあい								
1.親密	111	78.2	33.0(5.8)	n.s.	147	78.6	34.6(7.3)	4.0*
2.疎遠	31	21.8	34.0(6.0)		40	21.4	37.4(8.8)	
親しい友人								
1.あり	119	81.5	33.2(5.7)	n.s.	169	88.5	34.6(7.0)	11.6**
2.なし	27	18.5	33.6(6.0)		22	11.5	40.3(9.8)	
親しい親戚								
1.あり	94	63.9	32.7(5.6)	n.s.	102	53.7	33.8(6.7)	8.1**
2.なし	53	36.1	34.2(6.0)		88	46.3	36.9(8.3)	
団体加入								
1.あり	118	80.3	33.3(5.7)	n.s.	148	77.1	34.6(7.4)	4.5*
2.なし	29	19.7	32.9(6.4)		44	22.9	37.4(7.8)	

\*  $p < 0.05$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*\*\*  $p < 0.001$

	S市							
	男性 (n=155)				女性 (n=204)			
	n	%	SDS(SD)	F値	n	%	SDS(SD)	F値
別居子との交流								
1.月1-2度以上	97	62.6	34.5(8.7)	n.s.	107	52.5	34.8(7.7)	n.s.
2.あまり会わない	58	37.4	34.6(7.2)		97	47.5	35.1(6.7)	
近隣とのつきあい								
1.親密	66	43.4	33.9(7.7)	n.s.	115	57.2	33.9(6.8)	6.0*
2.疎遠	86	56.6	35.2(8.6)		86	42.8	36.4(7.6)	
親しい友人								
1.あり	103	66.5	33.8(7.1)	n.s.	164	80.4	34.6(7.1)	n.s.
2.なし	52	33.5	36.0(9.8)		40	19.6	36.8(7.5)	
親しい親戚								
1.あり	127	82.5	33.8(7.3)	7.7**	168	82.4	34.6(7.1)	n.s.
2.なし	27	17.5	38.5(10.8)		36	17.6	37.0(4.6)	
団体加入								
1.あり	96	61.9	33.7(7.6)	n.s.	129	63.5	35.0(6.9)	n.s.
2.なし	59	38.1	35.8(8.9)		74	36.5	35.1(7.8)	

\*  $p < 0.05$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*\*\*  $p < 0.001$

表3 1995年時のソーシャルサポートと1995年時のSDS得点

	Y市							
	男性 (n=147)				女性 (n=192)			
	n	%	SDS(SD)	F値	n	%	SDS(SD)	F値
サポート提供経験								
1.あり	131	89.1	33.0(5.8)	n.s.	159	82.8	34.8(7.4)	n.s.
2.なし	16	10.9	35.0(5.8)		33	17.2	37.3(8.4)	
援助者								
1.いる	144	98.0	33.1(5.6)	n.s.	185	96.4	35.0(7.2)	7.1**
2.いない	3	2.0	37.0(12.2)		7	3.6	42.6(12.8)	
相談者								
1.いる	143	97.3	33.2(5.6)		187	97.4	34.9(7.3)	14.2***
2.いない	4	2.7	34.5(11.1)	n.s.	5	2.6	47.5(8.7)	
* $p < 0.05$ , ** $p < 0.01$ , *** $p < 0.001$								
	S市							
	男性 (n=155)				女性 (n=209)			
	n	%	SDS(SD)	F値	n	%	SDS(SD)	F値
サポート提供経験								
1.あり	142	91.6	34.3(7.9)	n.s.	187	91.7	34.7(7.0)	4.3*
2.なし	13	8.4	37.4(10.5)		17	8.3	38.4(8.9)	
援助者								
1.いる	153	98.7	34.6(8.2)	n.s.	199	97.5	34.9(7.2)	n.s.
2.いない	2	1.3	29.5(6.4)		5	2.5	39.8(5.7)	
相談者								
1.いる	153	98.7	34.6(8.2)	n.s.	195	95.6	34.9(7.3)	n.s.
2.いない	2	1.3	29.5(6.4)		9	4.4	36.1(6.5)	
* $p < 0.05$ , ** $p < 0.01$ , *** $p < 0.001$								



表4 1995年時の身体的健康と1995年時のSDS得点

	Y市							
	男性 (n=147)				女性 (n=192)			
	n	%	SDS(SD)	F値	n	%	SDS(SD)	F値
主観的健康度								
1.良好	119	81.0	32.5(5.5)	9.3**	144	75.0	33.8(6.5)	24.8***
2.不良	28	19.0	36.1(6.2)		48	25.0	39.7(9.0)	
入院								
1.あり	32	21.8	34.2(5.3)	n.s.	36	18.8	38.2(8.8)	6.7*
2.なし	115	78.2	33.0(5.9)		156	81.3	34.6(7.2)	
身体の痛み								
1.あり	55	37.7	34.3(5.6)	n.s.	91	47.6	36.8(8.2)	6.9**
2.なし	91	62.3	32.4(5.7)		100	52.4	34.0(6.8)	
聴力								
1.良好	117	79.6	33.1(5.8)	n.s.	167	87.0	35.4(7.8)	n.s.
2.不良	30	20.4	33.7(5.8)		25	13.0	34.2(6.1)	
視力								
1.良好	137	93.8	33.1(5.8)	n.s.	169	88.5	34.6(7.1)	10.7**
2.不良	9	6.2	35.6(5.6)		22	11.5	40.2(9.9)	
失禁								
1.あり	15	10.3	33.5(5.7)	n.s.	26	13.7	36.0(7.6)	n.s.
2.なし	131	89.7	33.2(5.8)		164	86.3	35.1(7.6)	
痴呆の徴候								
1.あり	16	10.9	34.1(6.1)	n.s.	12	6.3	38.6(11.0)	n.s.
2.なし	131	89.1	33.1(5.8)		180	93.8	35.0(7.3)	
慢性疾患数			1.4±1.5				1.9±1.3	
			慢性疾患数とSDSとの相関：r=0.17*				慢性疾患数とSDSとの相関：r=0.28***	

\*  $p < 0.05$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*\*\*  $p < 0.001$

	S市							
	男性 (n=155)				女性 (n=204)			
	n	%	SDS(SD)	F値	n	%	SDS(SD)	F値
主観的健康度								
1.良好	121	79.1	32.5(6.5)	44.2***	167	82.7	33.4(5.9)	55.7***
2.不良	32	20.9	42.1(9.5)		35	17.3	42.2(8.2)	
入院								
1.あり	38	24.5	37.4(10.1)	6.4*	41	20.1	39.2(9.0)	19.5***
2.なし	117	75.5	33.6(7.3)		163	79.9	33.9(6.3)	
身体の痛み								
1.あり	56	36.4	39.7(8.8)	44.0***	99	48.5	37.6(7.8)	29.2***
2.なし	98	63.6	31.6(6.2)		105	51.5	32.5(5.6)	
聴力								
1.良好	122	78.7	33.8(7.7)	4.8*	176	86.3	34.5(7.1)	5.8*
2.不良	33	21.3	37.3(9.3)		28	13.7	38.0(7.3)	
視力								
1.良好	145	93.5	34.1(8.0)	5.6*	195	95.6	34.7(7.1)	6.8*
2.不良	10	6.5	40.4(8.7)		9	4.4	41.0(7.3)	
失禁								
1.あり	17	11.2	40.3(9.4)	10.9**	30	14.8	37.2(7.5)	n.s.
2.なし	135	88.8	33.6(7.6)		173	85.2	34.6(7.1)	
痴呆の徴候								
1.あり	13	8.4	41.2(9.2)	10.0**	13	6.4	42.0(8.0)	13.8***
2.なし	142	91.6	33.9(7.8)		191	93.6	34.5(6.9)	
慢性疾患数			1.7±1.4				2.1±1.7	
			慢性疾患数とSDSとの相関：r=0.30***				慢性疾患数とSDSとの相関：r=0.45***	

\*  $p < 0.05$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*\*\*  $p < 0.001$

表 5 1995 年時の社会活動性と 1995 年時の SDS 得点

	Y 市							
	男性 (n=147)				女性 (n=192)			
	n	%	SDS(SD)	F 値	n	%	SDS(SD)	F 値
ADL 不良								
1.あり	6	4.1	36.5(7.6)	n.s.	7	3.6	36.2(3.5)	n.s.
2.なし	141	95.9	33.1(5.7)		185	96.4	35.2(7.7)	
IADL			2.7±1.4				4.0±1.3	
			IADL と SDS との相関：r=-0.06				IADL と SDS との相関：r=-0.03	
趣味や生きがい								
1.持っている	128	87.1	32.4(5.2)	13.4***	133	70.4	34.0(6.5)	11.3***
2.持っていない	17	11.6	38.4(6.3)		50	26.5	39.18(9.28)	
3.その他	2	1.4	43.5(2.1)		6	3.2	29.5(3.2)	
**p<0.01, *** p<0.001								
	S 市							
	男性 (n=155)				女性 (n=204)			
	n	%	SDS(SD)	F 値	n	%	SDS(SD)	F 値
ADL 不良								
1.あり	9	5.8	44.9(6.6)	16.9***	3	1.5	37.9(9.5)	n.s.
2.なし	146	91.6	33.9(7.8)		201	98.5	34.9(7.2)	
IADL			2.5±1.3				4.2±1.2	
			IADL と SDS との相関：r=-0.06				IADL と SDS との相関：r=-0.26***	
趣味や生きがい								
1.持っている	128	83.1	33.3(7.3)	10.1***	178	88.6	34.4(7.0)	5.8**
2.持っていない	21	13.6	41.1(9.4)		20	10.0	40.0(7.5)	
3.その他	5	3.2	39.2(10.6)		3	1.5	40.3(11.8)	
**p<0.01, *** p<0.001								

表6 ストレスフル・ライフイベントの経験と1995年時のSDS得点

	男性 (n=147)				Y市				女性 (n=192)			
	n	%	SDS(SD)	F値	n	%	SDS(SD)	F値	n	%	SDS(SD)	F値
望まない住居の変化												
1.あり	4	2.7	34.1(8.8)	n.s.	2	1.0	51.0(15.6)	9.1**				
2.なし	143	97.3	33.2(5.7)		190	99.0	35.1(7.4)					
本人の健康状態悪化												
1.あり	21	14.3	37.0(5.6)	11.0**	32	16.7	39.8(9.4)	15.0***				
2.なし	126	85.7	32.6(5.6)		160	83.3	34.3(6.9)					
配偶者・家族の病気												
1.あり	9	6.1	35.5(5.8)	n.s.	17	8.9	40.2(9.1)	8.4**				
2.なし	138	93.9	33.1(5.8)		175	91.1	34.8(7.3)					
配偶者との死別												
1.あり	2	1.4	41.0(2.8)	n.s.	21	10.9	35.5(6.8)	n.s.				
2.なし	145	98.6	33.1(5.8)		171	89.1	35.2(7.7)					
配偶者との別れ												
1.あり	1	0.7	23.0(-)	n.s.	0	0.0						
2.なし	146	99.3	33.3(5.8)		192	100.0	35.3(7.6)					
家族との死別												
1.あり	5	3.4	34.2(5.3)	n.s.	3	1.6	42.6(12.7)	n.s.				
2.なし	142	96.6	33.2(5.8)		189	98.4	35.1(7.5)					
親しい友人との死別												
1.あり	19	12.9	35.1(6.8)	n.s.	23	12.0	35.9(9.1)	n.s.				
2.なし	128	87.1	32.9(5.6)		169	88.0	35.2(7.4)					
経済状態の悪化												
1.あり	13	8.8	33.0(5.6)	n.s.	19	9.9	35.6(9.1)	n.s.				
2.なし	134	91.2	33.2(5.8)		173	90.1	35.2(7.5)					
失業												
1.あり	6	4.1	32.2(5.9)	n.s.	0	0.0						
2.なし	141	95.9	33.3(5.8)		192	100.0	35.3(7.6)					
社会的役割の喪失												
1.あり	4	2.7	31.4(5.8)	n.s.	2	1.0	38.8(18.1)	n.s.				
2.なし	143	97.3	33.3(5.8)		190	99.0	35.2(7.5)					
借金の増加												
1.あり	0	0.0			1	0.5	51.6(-)	4.7*				
2.なし	147	100.0	33.2(5.8)		191	99.5	35.2(7.5)					
家族とのトラブル増加												
1.あり	1	0.7	23.0(-)	n.s.	3	1.6	41.5(10.9)	n.s.				
2.なし	146	99.3	33.3(5.8)		189	98.4	35.2(7.5)					
近隣・友人とのトラブル増加												
1.あり	2	1.4	28.0(2.8)	n.s.	1	0.5	41.1(-)	n.s.				
2.なし	145	98.6	33.3(5.8)		191	99.5	35.2(7.6)					
職場での負担増加												
1.あり	0	0.0			0	0.0						
2.なし	147	100.0	33.2(5.8)		192	100.0	35.3(7.6)					
裁判												
1.あり	0	0.0			0	0.0						
2.なし	147	100.0	33.2(5.8)		192	100.0	35.3(7.6)					
その他												
1.あり	6	4.1	32.3(6.4)	n.s.	6	3.1	45.0(12.6)	10.8**				
2.なし	141	95.9	33.3(5.8)		186	96.9	34.9(7.2)					
ライフイベント数			1.3±0.8				1.4±0.7					
			ライフイベント数とSDSとの相関：r=0.04				ライフイベント数とSDSとの相関：r=0.24**					

\* p<0.05, \*\*p<0.01, \*\*\* p<0.001

表6 ストレスフル・ライフイベントの経験と1995年時のSDS得点（続き）

	S市							
	男性 (n=155)				女性 (n=204)			
	n	%	SDS(SD)	F値	n	%	SDS(SD)	F値
望まない住居の変化								
1.あり	1	0.6	46.0(-)	n.s.	4	2.0	36.8(6.7)	n.s.
2.なし	154	99.4	34.5(8.1)		200	98.0	35.0(7.2)	
本人の健康状態悪化								
1.あり	29	18.7	42.0(9.3)	36.4***	43	21.1	40.7(8.4)	41.5***
2.なし	126	81.3	32.8(6.9)		161	78.9	33.5(6.0)	
配偶者・家族の病気								
1.あり	15	9.7	34.1(6.5)	n.s.	10	4.9	34.7(9.0)	n.s.
2.なし	140	90.3	34.6(8.3)		194	95.1	35.0(7.1)	
配偶者との死別								
1.あり	3	1.9	29.9(2.1)	n.s.	13	6.4	36.3(8.4)	n.s.
2.なし	152	98.1	34.6(8.2)		191	93.6	34.9(7.1)	
配偶者との別れ								
1.あり	0	0.0			0	0.0		
2.なし	155	100.0	34.5(8.2)		204	100.0	35.0(7.2)	
家族との死別								
1.あり	1	0.6	30.0(-)	n.s.	4	2.0	36.3(7.2)	n.s.
2.なし	154	99.4	34.6(8.2)		200	98.0	35.0(7.2)	
親しい友人との死別								
1.あり	34	21.9	33.5(7.7)	n.s.	26	12.7	36.1(8.2)	n.s.
2.なし	121	78.1	34.8(8.3)		178	87.3	34.8(7.1)	
経済状態の悪化								
1.あり	28	18.1	38.0(7.6)	6.2*	37	18.1	37.7(8.7)	6.4*
2.なし	127	81.9	33.8(8.1)		167	81.9	34.4(6.7)	
失業								
1.あり	8	5.2	34.9(8.8)	n.s.	1	0.5	30.0(-)	n.s.
2.なし	147	94.8	34.5(8.2)		203	99.5	35.0(7.2)	
社会的役割の喪失								
1.あり	3	1.9	47.0(6.6)	7.4**	5	2.5	34.6(9.8)	n.s.
2.なし	152	98.1	34.3(8.0)		199	97.5	35.0(7.2)	
借金の増加								
1.あり	1	0.6	46.0(-)	n.s.	3	1.5	41.6(11.2)	n.s.
2.なし	154	99.4	34.5(8.1)		201	98.5	34.9(7.1)	
家族とのトラブル増加								
1.あり	3	1.9	46.7(16.6)	7.0**	2	1.0	36.5(12.0)	n.s.
2.なし	152	98.1	34.3(7.8)		202	99.0	35.0(7.2)	
近隣・友人とのトラブル増加								
1.あり	3	1.9	42.0(18.3)	n.s.	0	0.0		
2.なし	152	98.1	34.4(7.9)		204	100.0	35.0(7.2)	
職場での負担増加								
1.あり	0	0.0			0	0.0		
2.なし	155	100.0	34.5(8.2)		204	100.0	35.0(7.2)	
裁判								
1.あり	2	1.3	38.0(0.0)	n.s.	0	0.0		
2.なし	153	98.7	34.5(8.2)		204	100.0	35.0(7.2)	
その他								
1.あり	4	2.6	37.5(3.1)	n.s.	7	3.4	38.4(7.5)	n.s.
2.なし	151	97.4	34.5(8.3)		197	96.6	34.9(7.2)	
ライフイベント数			1.3±0.7				1.3±0.8	
			ライフイベント数とSDSとの相関：r=0.31***				ライフイベント数とSDSとの相関：r=0.20**	

\*  $p < 0.05$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*\*\*  $p < 0.001$

表7 1992年時の基本属性と1995年時のSDS得点

変数	Y市							
	男性 (n=147)				女性 (n=192)			
	n	%	SDS(SD)	F値	n	%	SDS(SD)	F値
配偶者								
1.あり	130	88.4	33.1(5.5)	n.s.	76	40.0	34.5(7.0)	n.s.
2.なし	17	11.6	34.5(7.7)		114	60.0	35.8(8.0)	
学歴								
1.中卒以下	118	82.5	33.5(6.0)	n.s.	160	86.0	35.4(7.7)	n.s.
2.高卒以上	25	17.5	31.7(5.1)		26	14.0	35.2(7.4)	
仕事								
1.あり	54	37.8	32.0(5.9)	n.s.	39	21.4	32.3(5.9)	4.2*
2.なし	81	56.6	34.0(5.8)		133	73.1	36.1(7.8)	
3.その他	8	5.6	32.6(3.4)		10	5.5	36.5(8.0)	
収入								
1.10万円未満	12	8.4	33.1(6.3)	n.s.	61	34.1	35.8(7.9)	n.s.
2.10-20万円	49	34.3	34.0(6.2)		75	41.9	35.1(7.7)	
3.20万円以上	82	57.3	32.8(5.4)		43	24.0	35.4(7.4)	
家族構成								
1.一人暮らし	12	8.3	36.7(7.9)	4.6*	46	24.7	34.6(8.2)	n.s.
2.家族と同居	133	91.7	33.0(5.5)		140	75.3	35.4(7.6)	

\*  $p < 0.05$

変数	S市							
	男性 (n=155)				女性 (n=204)			
	n	%	SDS(SD)	F値	n	%	SDS(SD)	F値
配偶者								
1.あり	138	89.0	34.1(7.7)	n.s.	109	53.7	35.3(7.4)	n.s.
2.なし	17	11.0	38.0(11.2)		94	46.3	34.6(7.0)	
学歴								
1.中卒以下	60	38.7	35.1(8.7)	n.s.	91	45.0	35.1(7.2)	n.s.
2.高卒以上	95	61.3	34.2(7.8)		111	55.0	34.8(7.2)	
仕事								
1.あり	57	37.3	33.3(7.9)	n.s.	43	21.1	34.4(7.8)	n.s.
2.なし	86	56.2	35.5(8.6)		139	68.1	35.6(7.0)	
3.その他	10	6.5	32.8(5.1)		22	10.8	32.2(7.1)	
収入								
1.10万円未満	6	4.6	43.1(13.0)	4.1*	35	18.5	35.8(8.1)	n.s.
2.10-20万円	30	22.9	36.5(9.3)		61	32.3	34.5(7.4)	
3.20万円以上	95	72.5	34.0(7.4)		93	49.2	35.4(7.1)	
家族構成								
1.一人暮らし	14	9.0	37.5(10.0)	n.s.	51	25.0	35.2(7.8)	n.s.
2.家族と同居	141	91.0	34.2(8.0)		153	75.0	34.9(7.0)	

\*  $p < 0.05$

表8 1992年時のソーシャルネットワークと1995年時のSDS得点

変数	Y市							
	男性 (n=147)				女性 (n=192)			
	n	%	SDS(SD)	F値	n	%	SDS(SD)	F値
別居子との交流								
1.月1-2度以上	94	63.9	32.7(5.6)	n.s.	103	53.9	35.5(8.2)	n.s.
2.あまり会わない	53	36.1	34.2(6.0)		88	46.1	35.0(6.9)	
近隣とのつきあい								
1.親密	119	83.8	33.1(5.8)	n.s.	151	83.4	35.1(7.6)	n.s.
2.疎遠	23	16.2	34.6(5.9)		30	16.6	37.1(8.3)	
親しい友人								
1.いる	116	81.1	33.1(6.0)	n.s.	153	83.2	35.1(7.9)	n.s.
2.いない	27	18.9	34.4(4.4)		31	16.8	36.6(6.0)	
親しい親戚								
1.いる	73	52.1	32.9(5.3)	n.s.	81	43.3	34.8(7.7)	n.s.
2.いない	67	47.9	33.6(6.2)		106	56.7	35.5(7.6)	
団体への加入								
1.加入している	74	62.7	33.0(5.4)	n.s.	82	57.3	34.9(7.2)	5.2*
2.加入していない	44	37.3	33.9(6.3)		61	42.7	37.7(7.7)	

\* p<0.05

変数	S市							
	男性 (n=155)				女性 (n=204)			
	n	%	SDS(SD)	F値	n	%	SDS(SD)	F値
別居子との交流								
1.月1-2度以上	95	61.3	34.3(8.4)	n.s.	124	60.8	34.9(7.5)	n.s.
2.あまり会わない	60	38.7	34.9(7.8)		80	39.2	35.1(6.7)	
近隣とのつきあい								
1.親密	88	57.1	35.4(8.6)	n.s.	125	61.3	34.6(7.2)	n.s.
2.疎遠	66	42.9	33.4(7.5)		79	38.7	35.6(7.2)	
親しい友人								
1.いる	122	78.7	34.3(8.0)	n.s.	184	90.6	34.8(7.2)	n.s.
2.いない	33	21.3	35.5(8.7)		19	9.4	37.2(7.7)	
親しい親戚								
1.いる	122	78.7	34.4(8.0)	n.s.	168	83.6	34.7(6.9)	n.s.
2.いない	33	21.3	35.0(8.9)		33	16.4	37.0(8.4)	
団体への加入								
1.加入している	89	57.4	33.8(7.1)	n.s.	129	63.5	35.2(7.4)	n.s.
2.加入していない	66	42.6	35.6(9.4)		74	36.5	34.6(6.9)	

\* p<0.05

表9 1992年時のソーシャルサポートと1995年時のSDS得点

変数	Y市							
	男性 (n=147)				女性 (n=192)			
	n	%	SDS(SD)	F値	n	%	SDS(SD)	F値
援助者								
1.いる	142	96.6	33.2(5.7)	n.s.	188	98.4	35.3(7.6)	n.s.
2.いない	5	3.4	35.0(7.8)		3	1.6	34.1(11.0)	
相談者								
1.いる	140	95.9	33.2(5.7)	n.s.	184	97.4	35.1(7.6)	n.s.
2.いない	6	4.1	35.0(7.8)		5	2.6	39.7(7.8)	
サポート提供経験								
1.あり	107	73.3	33.3(5.6)	n.s.	148	78.7	35.1(7.5)	n.s.
2.なし	39	26.7	32.7(6.3)		40	21.3	36.6(8.1)	
* $p < 0.05$								
変数	S市							
	男性 (n=155)				女性 (n=204)			
	n	%	SDS(SD)	F値	n	%	SDS(SD)	F値
援助者								
1.いる	150	96.8	34.3(8.0)	4.1*	195	95.6	35.0(7.2)	n.s.
2.いない	5	3.2	41.7(11.6)		9	4.4	35.8(7.1)	
相談者								
1.いる	149	96.1	34.4(8.1)	n.s.	193	95.1	34.8(7.2)	4.6*
2.いない	6	3.9	37.7(9.3)		10	4.9	39.8(5.1)	
サポート提供経験								
1.あり	129	83.2	34.7(8.5)	n.s.	174	85.3	34.7(7.0)	n.s.
2.なし	26	16.8	34.0(6.6)		30	14.7	36.7(8.2)	
* $p < 0.05$								

表 10 1992 年時の身体的健康と 1995 年時の SDS 得点

	Y 市							
	男性 (n=147)				女性 (n=192)			
	n	%	SDS(SD)	F 値	n	%	SDS(SD)	F 値
主観的健康状態								
1.良好	117	81.3	32.7(5.9)	4.9*	137	75.7	34.2(6.6)	11.8**
2.不良	27	18.8	35.4(4.9)		44	24.3	38.7(9.7)	
入院								
1.あり	16	11.0	32.9(5.8)	n.s.	37	19.5	37.0(8.5)	n.s.
2.なし	130	89.0	33.2(5.8)		153	80.5	34.9(7.3)	
身体の痛み								
1.あり	42	29.4	33.5(5.3)	n.s.	86	46.0	36.9(8.2)	7.9**
2.なし	101	70.6	33.2(6.1)		101	54.0	33.8(6.8)	
聴力								
1.良好	122	85.9	33.2(6.0)	n.s.	163	88.1	35.1(7.2)	n.s.
2.不良	20	14.1	34.0(5.1)		22	11.5	37.9(10.3)	
視力								
1.良好	132	94.3	33.3(5.8)	n.s.	171	91.9	35.1(7.3)	n.s.
2.不良	8	5.7	35.5(6.0)		15	8.1	38.7(10.4)	
失禁								
1.あり	20	14.4	35.0(5.0)	n.s.	29	15.7	34.8(6.8)	n.s.
2.なし	119	85.6	32.7(5.9)		156	84.3	35.5(7.7)	
痴呆の徴候								
1.あり	0	0.0			3	1.6	48.0(16.5)	8.9**
2.なし	147	100.0	33.6(6.6)		189	98.4	35.1(7.3)	
慢性疾患数			1.2±1.3				1.7±1.3	
SDS 得点 (平均±SD)			33.6±6.6	慢性疾患数と SDS との相関: r=0.11			35.6±7.2	慢性疾患数と SDS との相関: r=0.24**
				92 年と 95 年の相関: r=0.39***				92 年と 95 年の相関: r=0.45***

\* p<0.05, \*\*p<0.01, \*\*\* p<0.001

	S 市							
	男性 (n=155)				女性 (n=204)			
	n	%	SDS(SD)	F 値	n	%	SDS(SD)	F 値
主観的健康状態								
1.良好	131	84.5	33.2(7.3)	25.7***	164	80.8	33.2(6.0)	62.6***
2.不良	24	15.5	41.8(8.9)		39	19.2	42.1(7.5)	
入院								
1.あり	26	17.3	37.3(8.7)	n.s.	38	19.1	37.1(8.0)	n.s.
2.なし	124	82.7	33.9(8.0)		161	80.9	34.6(7.0)	
身体の痛み								
1.あり	54	35.8	38.5(9.3)	23.7***	93	46.3	37.5(8.0)	24.0***
2.なし	97	64.2	32.2(6.5)		108	53.7	32.8(5.7)	
聴力								
1.良好	135	87.1	34.0(7.9)	4.8*	177	88.1	35.0(7.2)	n.s.
2.不良	20	12.9	38.2(9.0)		24	11.9	35.2(7.3)	
視力								
1.良好	150	96.8	34.4(8.1)	n.s.	192	95.0	34.9(7.3)	n.s.
2.不良	5	3.2	40.1(9.7)		10	5.0	37.3(6.5)	
失禁								
1.あり	14	9.0	43.0(9.3)	18.5***	17	8.3	37.2(7.4)	n.s.
2.なし	141	91.0	33.7(7.6)		187	91.7	34.8(7.2)	
痴呆の徴候								
1.あり	4	2.6	41.4(8.8)	n.s.	7	3.4	39.6(10.2)	n.s.
2.なし	151	97.4	34.4(8.1)		197	96.6	34.8(7.1)	
慢性疾患数			1.5±1.3				1.6±1.4	
SDS 得点 (平均±SD)			33.3±7.7	慢性疾患数と SDS との相関: r=0.32***			35.8±6.6	慢性疾患数と SDS との相関: r=0.43***
				92 年と 95 年の相関: r=0.60***				92 年と 95 年の相関: r=0.64***

\* p<0.05, \*\*p<0.01, \*\*\* p<0.001



表 11 1992 年時の社会活動性と 1995 年時の SDS 得点

	Y 市							
	男性 (n=147)				女性 (n=192)			
	n	%	SDS(SD)	F 値	n	%	SDS(SD)	F 値
ADL 不良								
1.あり	4	2.7	36.5(7.6)	n.s.	4	2.1	37.9(4.1)	n.s.
2.なし	143	97.3	33.1(5.7)		187	97.9	35.2(7.7)	
IADL			2.6±1.3				4.0±1.3	
			IADL と SDS との相関: r=0.06				IADL と SDS との相関: r=-0.16*	
趣味や生きがい								
1.持っている	113	89.7	33.0(6.0)	n.s.	123	81.5	34.4(7.0)	n.s.
2.持っていない	11	8.7	33.3(5.9)		25	13.0	37.8(6.0)	
3.その他	2	1.6	40.0(2.8)		3	1.6	39.7(15.0)	

\* p<0.05, \*\*p<0.01

	S 市							
	男性 (n=155)				女性 (n=204)			
	n	%	SDS(SD)	F 値	n	%	SDS(SD)	F 値
ADL 不良								
1.あり	6	3.9	44.0(7.9)	8.8**	3	1.5	37.1(8.0)	n.s.
2.なし	149	96.1	34.2(7.9)		201	98.5	35.0(7.2)	
IADL			2.5±1.3				4.3±0.9	
			IADL と SDS との相関: r=0.04				IADL と SDS との相関: r=-0.15	
趣味や生きがい								
1.持っている	137	90.7	33.8(7.8)	4.4*	187	94.0	34.9(7.3)	n.s.
2.持っていない	12	7.9	40.8(9.6)		11	5.5	36.1(5.8)	
3.その他	2	1.3	35.5(2.1)		1	0.5	47.0(-)	

\* p<0.05, \*\*p<0.01

表 12 1995 年時の状況が 1995 年時の SDS 得点に及ぼす影響（重回帰分析）

変数（カテゴリー）	Y 市					
	男性			女性		
	B	$\beta$	p 値	B	$\beta$	p 値
仕事（あり）						
別居子との交流（月 1-2 度以上）				-2.77	-0.18	**
親しい親戚（あり）						
主観的健康状態（良好）	-2.72	-1.89	*	-3.33	-0.28	***
身体の痛み（あり）						
聴力（良好）						
ライフイベント数				1.57	0.15	*
$R^2$		0.30	***		0.42	***

\*  $p < 0.05$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*\*\*  $p < 0.001$

年齢，教育歴，ベースライン時の SDS 得点，慢性疾患数で調整

変数（カテゴリー）	S 市					
	男性			女性		
	B	$\beta$	p 値	B	$\beta$	p 値
仕事（あり）				-2.36	-0.15	**
別居子との交流（月 1-2 度以上）						
親しい親戚（あり）	-2.49	-0.12	*			
主観的健康状態（良好）				-2.95	-0.15	**
身体の痛み（あり）	4.59	0.27	***			
聴力（良好）	-3.21	-0.17	**			
ライフイベント数						
$R^2$		0.30	***		0.42	***

\*  $p < 0.05$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*\*\*  $p < 0.001$

年齢，教育歴，ベースライン時の SDS 得点，慢性疾患数で調整

## 研究報告 3

### 前期および後期高齢者の抑うつ状態に及ぼす 社会的サポート・ネットワークの役割

主任研究者 岸 玲子 北海道大学大学院医学研究科予防医学講座公衆衛生学分野 教授

#### 研究要旨

社会的サポート・ネットワークが前期および後期高齢者の抑うつ状態に及ぼす影響について検討した。北海道の農村 A 町に在住する 69-82 歳の高齢者全数に対して 1992 年にベースライン調査を実施し、652 名の回答を得た。1995 年に同様の方法で追跡調査を実施し、562 名の回答を得た。1995 年時の SDS を目的変数とする重回帰分析を行った。説明変数は 1995 年時の基本的属性、社会的サポート・ネットワーク、身体的健康状態および社会的活動性である。説明変数が質的変数の場合は  $\chi^2$  検定、量的変数の場合は一要因分散分析で抑うつ状態との関連を検討し、単変量解析で有意な関連がみられたものについて、年齢や諸属性、健康指標の影響を調整して重回帰分析を行った。社会的サポート・ネットワークと抑うつ状態との関連を検討した結果、前期高齢者では、「親しい友人の有無」、「団体活動への参加」と抑うつ状態との間に有意な関連が認められ、後期高齢者では、「近隣との交流」、「親しい友人の有無」との間に有意な関連が認められた。さらに、ベースライン時の SDS および他の変数を調整後も、「近所づきあいが親密である」ことは SDS を有意に低下させた。今後は本研究で得られた成果を、地域の抑うつ予防や閉じこもり予防活動の実践に活かし、地域に既存のサポート・ネットワークを抑うつ予防活動の資源と位置づけ、活動に活かしていくことが重要である。また、高齢者における抑うつ予防や QOL 向上の適切な対策を講じていくことが望まれる。

#### 研究協力者

浦田 泰成 西條 泰明 堀川 尚子  
佐藤 徹郎 吉岡 英治

(北海道大学大学院医学研究科予防医学講座  
公衆衛生学分野)

(2025) には 28.7%、平成 62 年 (2050) には 35.7%に達するものと推計されている。平均寿命の伸びも著しく、平成 14 年には、男性で 78.3 歳、女性で 85.2 歳を記録し、わが国は世界有数の長寿国といえる。

今後の高齢者の保健・福祉問題を予測し、有効な対応策を講じるには、今後増加するであろう後期高齢者がどのような特性を持った集団であるかを把握することが重要となる。近年、高齢者を対象とした調査が数多く行われているが、分析対象として後期高齢者を取り上げ、その特徴を分析した研究はほとんどみられない。そのため、後期高齢者が前期高齢者と同じ特質を持つ集団なのか、または異質な集団なのか十分に把握されていない。

#### A. 研究目的

今日、世界的に平均寿命が延び、世界の人口の 10 人に 1 人が高齢者 (65 歳以上) である。現在、わが国では、急速に高齢化が進んでおり、高齢者人口の割合は世界的に見ても高い。厚生統計協会 (2003)<sup>11)</sup> によると、全人口に占める 65 歳以上の高齢者の割合は年々延び続け、平成 14 年には 18.5%に達した。今後も増加を続け、平成 37 年

高齢者人口の急増は、精神保健面から見ると、Alzheimer 型痴呆や脳血管性痴呆が増えるということだけではなく、うつ病性障害も増える可能性を意味している。しかし、高齢者のうつ病は見逃されやすく、適切な治療を受けられず、社会的機能が障害されたままであることも少なくないのが現状である。今後、高齢者のうつ病や抑うつ状態に今まで以上に目が向けられるべきである。

高齢者の精神的健康において、最も重要な問題のひとつとされているのが抑うつである。高齢者の抑うつ状態はさまざまな面で大きな問題を引き起こすと考えられる。わが国では、年齢が高くなるにつれて自殺率は高率となり、高齢者の自殺率は非常に高いことが指摘されている<sup>1)</sup>が、その前段階には抑うつ症状があるとされる<sup>7)</sup>。また、抑うつによる健康状態悪化が高い死亡率につながる可能性も指摘されている<sup>2)</sup>。このように、抑うつ状態は高齢者の QOL や主観的幸福感の向上の大きな障壁となっている。

これまでの研究で、近親者との死別や、身体疾患といった、急性のストレスフル・ライフイベントがうつ病の誘引因子となることが示唆されている<sup>8) 9)</sup>。一方で、ソーシャルサポートやサポート・ネットワークといった、うつ病を予防できる可能性のある因子が存在することも指摘されている<sup>5) 6) 10)</sup>。欧米では、1980 年代以降、高齢者の抑うつ状態に影響を及ぼす他の要因を調整した上で、抑うつとサポート・ネットワークとの関連を示した報告がなされている<sup>5) 6)</sup>。しかし、わが国では、高齢者の抑うつ状態とサポート・ネットワークについて、疫学研究で検討された研究は少ない。

そこで、本研究では、前期および後期高齢者の抑うつ状態に及ぼす社会的サポート・ネットワークの役割を明らかにすることを目的として前向き疫学研究で検証した。

## B. 研究方法

### (1) 対象と方法

調査の対象は、北海道の農村 A 町に在住する高齢者である。ベースライン調査は 1992 年に、当

時 69-82 歳の高齢者全数 769 名に対して自記式調査票を郵送し、町役場や老人会の協力を得て回収した。有効回収数は 652 名（有効回収率 84.8%）であった。1995 年に、1992 年から 1995 年までの死亡 95 名を除く 671 名に対し、同様の方法で追跡調査を実施した。追跡調査の有効回収数は 562 名（有効回収率 83.8%）であった。

解析対象は、これら 2 回の調査に回答し、両年の調査の抑うつスケール (SDS) に 18 項目以上回答した 457 名（男性 214 名、女性 243 名）である。

### (2) 調査項目

#### a) 基本的属性

基本的属性として、性別、年齢、配偶者の有無、学歴、仕事の有無、世帯収入（1 ヶ月あたり）、家族構成を尋ねた。性別、年齢、学歴は、ベースライン時のみ調査した。配偶者関係については、「あり」と「なし」に分類した。学歴については、中学校卒業以下、高校卒業以上に二分した。仕事については、現在仕事をしているかどうか尋ねた。世帯収入については、月収が「10 万円未満」、「10~20 万円」、「20 万円以上」の 3 カテゴリーに分類した。家族構成については、「一人暮らし」と「家族と同居」に分類した。

#### b) 抑うつ状態

抑うつ症状の重症度を評価するために、Zung 自己評価式抑うつ尺度 (Zung' s Self-Rating Depression Scale; SDS)<sup>12)</sup> を用いた。SDS は重症度評価だけではなく、スクリーニングなどにも用いられる。「気分が沈んでゆううつだ」、「夜よく眠れない」など、20 の質問項目から構成され、各項目は 4 段階（いつも、たいてい、ときに、いいえ）で評価され、総得点で抑うつ度を示す。この総得点が高いほど抑うつ程度が高いことを示すとされ、得点範囲は 20 点~80 点である。

#### c) 社会的ネットワーク

社会的ネットワークの指標として、別居子との